特257
315

明日の醫術 第二篇下

始

特 257
315

六、心臟病及ビ高血壓

心臟病は、醫學上大体夾心症、瓣膜症、肥大症等に別けられてゐる。

夾心症は、發作的に突如として、胸部一面激烈な痛みと壓縮感、呼吸切迫等、その苦痛は名狀すべからざる程で、寔に恐るべき病氣である。重症は一回の夾心症によつて生命を落す事さへあるが、大抵は一旦恢復するものである。此原因は、心臟の周圍に滯溜する毒素が第十淨化作用によつて心臟の周圍から心臟に向つて求心的に强壓するのである。之は自然治療では困難であるし、醫療は注射によつて一時的少康を得させるだけであるが、本療法によれば容易に根治するのである。

又瓣膜症は、重症は夾心症と同一の原因であるが、ただ夾心症よりも、第一淨化作用が緩慢であるから、激烈な苦痛はないので、心悸亢進、脈搏不正、輕度の呼吸逼迫等が重なる症狀である。又輕症は心臟附近の前後の肋骨部又は横隔膜邊に溜結せる毒素が、淨化作用による微熱の爲に心臟を亢奮させるのである。

又、心臟肥大症は、之は罕にはあるが、大多數は醫家の誤診である。それは心臟附近に溜結せる毒素の塊を心臟肥大と診誤るのであらう。但だ大酒家やスポーツマンにのみ眞の肥大症がある譯で、普通人には殆んど無いといつても可いのである。そうして右の毒素凝結は、自然淨化により多くは喀痰となつて排泄治癒するものである。

次に近來、高血壓の症狀が、壯年以後に多いのであつて、而も高血壓者は腦溢血が起り易いとされてゐるが、之は醫學で曰ふ程ではないので、高血壓者必ずしも起るとは限らないが、統計上、低血壓者よりも多いことは事實である。

そうして、腦溢血の原因は、曩に說いた如く左右兩頸部（耳下腺附近）及び左右延髓附近の毒素溜結にあるが、實は高血壓の原因は、右四個所以外にあるのである。卽ち兩頸部より稍々前方卽ち扁桃腺の直下の位置に毒素溜結し、それが動脈を壓迫するので、此動脈は腕に連絡してゐる關係上、血壓計に高く表はれるのである。

右の證左として頗る好適例を書いてみよう。先年六拾歲位の男子で、血壓三百といふ人が私の所へ來た。そうして本人曰く「私の血壓は三百以上あるかも知れない。何となれば、血壓計の最高が三百であるから、何時計つてもすぐ三百に達するので、そう思はれる」との事である。そうして其人は、右の如き高血壓であるに拘はらず、高血壓發見以來今日迄五六年の間、每日會社へ勤めてゐるが、何の異常もないといふのである。之は全く、腦溢血と高血壓の根原の位置の異ふ事を、如實に物語つてゐるのである。因みに此人は筆耕書きを三拾年もやつて居り、右の動脈が非常に太くなつてゐる爲で全く凝りが原因である

七、腦疾患

近代人に特有の腦に關係ある疾患を說いてみよう。今日最も多いのは、何といつても腦神經衰弱であらう。症狀としては、頭痛、眩暈、壓迫感、濛朧感、焦燥感、憂鬱症、不眠症等である。

右の中最も多いのは慢性頭痛であるが、之は何が原因かといふと、最初、感冒其他によ

る發熱時に、頭痛に對し氷冷法を行ふが、之が主なる原因である。それは、發熱時には大抵頭痛がある。それは頭腦の毒結が淨化作用によつて溶解し、流動を起す。其爲の痛みであるが、それを氷冷すると溶解が停止し、再び凝結する爲、その再凝結に對して、緩慢な淨化作用が常に起る。それが慢性頭痛である。故に、斯ういふ人の頭に掌を宛てると必ず微熱がある。そうして、全頭部もあるが、前頭部又は後頭部又は一局部の場合も多いのである。これも、自然療法によれば、完全に治癒するのである。

又、右とは別の原因による頭痛がある。それは腦貧血であつて、その原因は、感冒の項目で說いた如く、淋巴腺附近の毒結が血管を壓迫し、貧血を起すのであつて、これは頭腦に掌を宛つれば、反對に無熱であるばかりか反つて普通より冷いことがある。そうして、發病するや、發作的に顏面は著るしく蒼白となり、强度になると意識を失ふことさへあり激しいオウ吐感もある。これを治癒しようとするには、出來るだけ運動をし、淨化作用をおこさせ發熱をさせ、それによつて、淋巴腺附近の毒結を、溶解排除させなければならないのである。

壓迫感は頭腦全体に滯溜してゐる毒素が、第一淨化作用による凝結作用と、それによつて血液の循還を妨げられる爲である。又、腦貧血に因る血液不足の爲もある。

不眠症及び濛朧感は、病氣症狀の項目に說いてあるから略すが、焦燥感に就て、說明してみよう。元來、人間の頭腦の作用は、大別して理性と感情を司り、前頭部は理性を、後頭部は感情を司る。理性とは、智慧、記憶、考慮等であつて、學者の如き例外なく前頭部が發達してゐるのは、常に理性的の仕事をするためである。又、感情卽ち喜怒哀樂を司るのは後頭部であるから、後頭部の發達した人は、感情が優れてゐるのである。故に男子は前頭部が發達し、女子は後頭部が發達して居り、白人は前頭部が發達し、東洋人は後頭部が發達してゐる事實をみても明かである。從つて前頭部に毒素があり微熱がある人は、考慮が散漫で精神集注が困難となり、記憶も鈍く且つ物に倦き易いのである。學生なども成績の不良なのは斯ういふ症狀によるので、私が治療した頃、此前頭部の毒素を解消するに

從ひその成績が目立つて良くなつたのである。又後頭部の毒素と微熱は、感情を惑亂させるから、焦燥感が起り易いのである。

よく小兒で勘が強いとか、癇氣があるとかいふのは右の理によるのであつて、斯ういふ子供の頭腦に掌を宛つれば、必ず微熱がある。その微熱が解消するに從つて、癇氣がなくなり、學校の成績も佳良になるのである。然るに、世間右の理を知らない爲、癇下しとか禁厭などに賴る人もあるが、あまり効果がないのは見當違ひであるからである。

次に、腦膜炎に就て說いてみよう。これは前頭部の淨化作用であつて、前頭骨膜部に溜結せる濃毒素に對し、激烈なる淨化作用が起るのである。症狀としては、堪え難い激しい頭痛があり、又患者は眼を開け得ないが、それは、眼を開けると非常に眩しいからである故に、前頭部が火の如き高熱と、眼を開け得ない症狀は、腦膜炎と斷定して差閊へないのである。特に幼兒に多い病氣であるが、幼兒は痛みを愬ふる事を知らないから、高熱と瞑目とによつて、腦膜炎である事を判斷すべきである。此場合醫療は氷冷法を何寄りとして行ふのであるが、これが最も惡いのである。これがために治癒しても痴呆症の如き不具者となるのである。その理由は如何なる譯かといふと、本來、順調の經過をとるとすれば、溜結毒素が、淨化作用によつて液体化し、下方へ流動し、目脂及び鼻汁となつて排泄され完全に治癒するのである。然るに、氷冷をすると、溶液化した毒素は、外部への流動を轉じ、內部へ向つて浸透し、前腦の組織にまで入つて凝結するのである。これは、曩に說いた如く、中耳炎を氷冷し、頭腦へ方向轉換するのと同一の理である。すべて、溶解毒素の運動は、氷冷の如き强力なる淨化作用抑止はその流動を阻止して、別方面に轉換させるのである、そうして右の如く、前腦組織機能に於ける毒素溜結は、機能本來の活動に支障をおこさせるから、豫後不具同樣となるのである。故に、腦膜炎は治癒しても不具になるから恐ろしいといふのは、實は誤れる療法のためである。私は、腦膜炎を何人も治癒さしたが、治癒後反つて發病以前よりも頭腦明晰となつて、兒童等は敎師が不思議と思ふほど、成績優良になるのである。

次に、腦溢血に就て說いてみよう。此病氣も近來非常に多いのは、人の知る所である。而も此病氣は、肺患が青年期に多いやうに、之は壯年以上ー老年期に多いのであつて、社會上幾多の經驗を重ね、事物に通じ、圓熟の境に達し、人により事業の基礎も出來、社會的地位も獲、これから大いに國家に盡さんとする頃に發病するといふ、厄介極まる病氣である。實に個人の不幸は素より、國家社會にとつても、其損失は蓋し少なからぬものがあらう。そうして、一度此病氣に罹るや、忽ちにして生命を奪はれる事も多いが、萬一僥倖にして生命だけは取止め得たとしても、中風になつて、左右孰れかの半身は不隨となり、惡性は舌の運動にも支障を來し、言語を操る能はず、又頭腦に支障を來す事もある。而も完全に治癒するものは殆んどないといつても可い位で、稀に幾分輕快に赴く事がある位である。それのみか、此病氣の特質として、經過は頗る長期間に渉り、終にタホれるといふ洵に悲慘な病氣である。搗て加へて、身体の自由を失ふから、その看護や取扱についても家人の困苦や費用の莫大等、實に同情に堪へないものがある。そうして、現代醫學に於ては、治療の方法は全然ないとされてゐる。勿論、豫防の方法も無く、原因も適確には判つてゐないやうである。

此病氣に就て、私の研究した所によれば、左の如きものである。先づ左右孰れかの延髓附近に溜結せる毒素又は毒血と、左右孰れかの頸動脈附近に溜結せる毒素又は毒血の淨化作用が原因である。そうして、一度淨化作用がおこるや、溜結せる毒素又は毒血は、發熱によつて溶解し、一旦腦中樞部に侵入し、忽ち流下して、反對側の動脈を通じ、腕及び脚部に溜結するのである。そうして、そうなるまでの過程は、實に速かであつて、一瞬の間であると言つてもいい。故に、發病するや、ほとんど同時位に、半身不隨となるのである。そうして發病時をみるに、初め、俄然として顏面紅潮を呈し、間もなく反對に蒼白となるのである。それは、紅潮は、腦に侵入した毒血が、直に、顏面に氾濫する爲であり、蒼白は、それが何れへか凝結して貧血するためである。此場合醫療に於ては、血管を速かに收縮させ、內出血を止むる目的を以て、氷冷を行ふのであるが、それはその目的に對しては

何の効果もないのみか、他の悪化作用が恐るべきである。それは先づ溢血するや、溢出しただけの血液は速かに何れへか流下又は凝結し、血管は瞬時に自然收縮し、溢血は停止するのである。卽ち氷冷を行ふや、溢血後、頭腦内に殘存せる毒素を、より硬結させるといふ事になり、機能に支障を來さすのである。而も、氷冷期間永き場合、頭腦は痳痺し、そのためタホれる事さへある。又、腦溢血後、人事不省期間が永い事も、氷冷の影響が大いにあることを想ふべきである。

故に、この病氣に罹つても、醫療又は何等の方法も行はず、そのまま放任しておく時は完全に治癒する事があるのである。それに就て、斯ういふ例がある。私が以前扱つた五拾歳位の婦人であつたが、その人は、東北の小さな或町の資産家の夫人であつた。會々腦溢血にかかり、富裕なために、東京からも專門の博士を招きなどして、出來るだけの療法を行つたのであるが、更に効果なく、約貳年を經過した頃は、むしろ幾分惡化の狀態をさへ呈したのである。然るに、その頃、その町の町外れの小やかな農家の、やはり五拾幾歳で

右の婦人と同時頃、中風に罹つた男があつた。それが或日、その婦人の家を、何かの用で訪ねたのである。ところが、婦人は驚いて「あなたも中風で、半身不隨との話を聞いたが今みれば、何等の異常もなく、健康時と變らないのは、一体どうしたのであるか。どんな療法をしたのか、どんな藥を服んだのかと質いた所、その老農夫曰く「儂等は貧乏で、醫者へかかる事も出來ず、藥も買へないから、運を天に任して、何等の方法も行はず、ただ寢てゐたのであるが、時日の經つに從つて、自然に良くなつたのである」ーといふので、その婦人は、不思議に堪えなかつたとの事であつたが、私の説を聞いてはじめて諒解がいつたというやうなことがあつた。右のやうな例は二三に止まらなかつたので、これ等を以てみても、私の説の誤りでない事を知るであらう。

近來季節的に流行する疾患に、嗜眠性腦炎がある。これの原因に就ては、醫學者間に於ても諸説紛々として、未だ眞の原因は確定しないやうである。そのうち、割合信じられてある説に〝蚊が媒介する〟ーといふ説である、もし、蚊が媒介するとすれば、冬季は一人

も無いはずであるのに、偶には、患者があるといふことは、如何なる譯であらうか。

私の發見によれば、この病氣にかかるや、先づ、高熱はもとより、特に著るしく左右いづれかの延髓附近に、たえず猛烈に毒素が集溜するので、集溜した毒素は、小腦へ向つて流入するのである。そうして、延髓附近から小腦部へかけて施術するに於て、延髓部の集溜は、漸次、減退するのである。そうして、普通二三日を經て、多量の目脂及び鼻汁が排泄しはじめてくる。重症は、それに血液の混入を見ることもある。そうして盛んに排泄せらるるに及び、漸次覺醒して恢復に向ふのである。右の如き經過によつて、一週間位にして全治するのであつて、この病氣は、何等手當特に氷冷を施さなければ必ず治癒し、生命に危險はないものである。

右を説明してみよう。原因としては、夏日頭腦を炎天下に、長時間さらす場合、その刺戟によつて、背部及び肩部附近にある毒素が急激に、頭腦に向つて集流するのである。そうして、其毒素が小腦中に侵入し、嗜眠作用をおこすのである。此病氣が夏に多いこと、兒童に多い事などは、右の理に由るからである。そうして小腦中に侵入した毒素は、尚進んで眼球部及び鼻孔から排泄し、治癒するのであつて、勿論猛烈な淨化作用である。然るに此場合、醫療は主として氷冷を行ふから、毒素は其局部に凝結して、排泄し能はざるに至り、嗜眠はそのまま持續し、終に衰弱して死に到るのである。

又腦背髓膜炎といふ病氣がある。之は高熱と共に、後頭部から延髓附近へかけて、痛み又は引吊る如く硬直するといふ、非常に苦痛を訴ふるものである。以上の如き病勢が執拗に持續し、食慾も不振となり、終に衰弱、死に到るのである。此病氣の原因は、嗜眠性腦炎の一歩手前ともいふべきもので、卽ち、毒素が小腦内に流入する迄に至らないで、その手前に集溜固結しようとするのである。故にこれが夏季炎天下に晒さるれば、嗜眠性腦炎となるのである。そうして腦脊髓膜炎も治癒に向ふ際は、その毒素は頗る多量の鼻汁となつて排泄せらるるものである。

次に、腦震蕩であるが、之は高所から顚落するか、又は腦を强打された場合に起るので

ある。そうして内出血の甚だしい場合、生命を失ふに至るのである。内出血多量である場合は盛んに嘔吐をなし、又、耳孔へ血液が浸潤する事もある。二三回位の嘔吐なら生命に別條はないが、數回以上の場合は、生命の危險を想ふべきである。

すべて腦に關した病氣の輕重を知るには嘔吐が一番確實である。

八、近　眼

曩に統計に示した如く、近來、日本人に最も多い病氣として近眼がある。醫學に於ては絶對不治であるとし、止むなく眼鏡によつて補はうとしてゐる。然し、眼鏡使用は非常に悪いのであつて、眼鏡をかけ始めれば、近眼の度が增々進むといふ事實は人のよく知る處である。何となれば、眼鏡の力を借りるだけ眼自体の力が弱まるからである。然し乍ら、眼鏡を用ひなくてはどうする事も出來ないから致し方ない譯である。

然らば、その原因は如何といふに、醫學に於ては、光線や見書の間隔等の關係を唱へて

ゐるが、之も幾分の原因とはならうが、根本原因ではないので、醫學ではその眞因は未發見である。然し、私の發見した原因は左の如きものである。

人間の体内にある毒素は、神經の集注する個所に集溜固結する事は、曩に說いた通りで近眼もそれであつて、然毒が延髓附近に集溜固結するのである。

元來、視力なるものは、眼の活動へ對して絶えずエネルギー卽ち血液を補給してゐるからである。その送血路卽ち血管が延髓部に在るので、それが毒結によつて壓迫される場合それだけ眼に送る血液が不足する。卽ち視力が榮養不足するから弱るのは當然である。其結果、遠方を視得るだけの力が足りない。宛かも空腹の爲、遠方まで歩行し得ないのと同一の理である。その證左として、次の例を擧げてみよう。

兒童が、それ迄異常がなかつたのに、小學校へ入學すると、間もなく近眼になるといふ例がよくある。之は、急に頭腦を使用し初めた爲、然毒が頭腦へ向つて集溜し始める。そうして机に向つて頭を下げるので、首筋へ毒素溜結ー卽ち凝りが出來るのである。それが

右說いた如く、近眼の原因となるのである。故に、近眼の患者の首筋を檢するに、必ず毒結があるからよく判るのである。私は、右の毒結の溶解治療を施すに於て、鼻汁となり、排泄解消されて、何れも全治したのである。

右の理に由つて、鼻汁を多く垂らす兒童は近眼にはならないのである。卽ち、ハナミズを垂らす位の兒童は健康で、淨化作用が旺盛である。然るに、近頃の兒童はハナ垂小僧はあまり見受けなくなつた。それは、藥毒等によつて虛弱になつた爲で、近眼の多くなつたのも亦やむを得ないのである。昔から涎を垂らす赤兒及びハナを垂らす兒童は、健康であるといはれたのはそういふ譯である。

次に、序でだから亂視に就て說いてみよう。之も近眼と同一原因であつて、視力の衰弱した結果、物体の映寫に視力の方が負けるので物体が動搖したり、二重に見えたりするのである。又日光などが眩しいのは、光線に負けるからである。近眼と亂視の合併症が多いのも右の理に由るのである。

九、眼病

茲で、眼疾に就ての醫學の誤謬を說いてみよう。最も多いとされてゐるトラホーム及び濾胞性結膜炎を採り上げてみよう。之は人も知る如く眼球に異常はなく、眼瞼の裏に發疹が出來るので、トラホームは上瞼、濾胞性結膜炎は下瞼が主である。醫學に於てはトラホームは傳染すると謂はれてゐるが、之は研究の餘地は充分あると思ふのである。又、醫療に於ては手術が良いとされてゐる。然し、手術は一時輕快しても根治する事は少なく、一二年後には、大抵再發するものである。よつて再度の手術をする。復おこる。復再發するといふ具合で、漸次輕快期間が短縮され、症狀も惡性化し、恰度、手術中毒ともいふべき症狀になるのである。そうして右の如き惡性となると、激痛、不快感等堪え難く、眼を開けば非常に眩しく、眼を閉じるのやむを得ない狀態で、眼球は紅潮を呈し、斷えず涙や膿汁が溢れ出で、實に視るに堪えない醜さである。之等甚しき痛苦は、全く手術と藥毒の結果である事はいふ迄もないのである。

トラホームの原因としては、一種の毒素が眼瞼裏から排除されようとして發疹するのであるから、勿論淨化作用であり、氣永に放任しておけば治癒するのである。從而、傳染といふ事は、持てる毒素を誘發、排除させるのであるから、實は可い譯である。

濾胞性結膜炎は、自然に治癒するものであるから、問題にする必要はないであらう。

次に、多い症狀として血膜炎がある。之は眼瞼緣炎又は血眼などと稱し、眼球が非常に紅潮を呈し、目脂、涙等が溢れ出るのであつて原因は、前頭部に滯溜する毒素が淨化作用によつて、眼球部から排除されようとするのである。故に、放任しておけば順調に治癒するので、治癒後は、頭腦の毒素が輕減するから頭痛などは輕快するのである。右の理を知らない世人は、點眼藥又は硼酸洗滌等によつて淨化作用の抑止をするので、治癒は後れるのみならず、藥毒の浸潤によつて、反つて增惡し、視力障碍さへ起すといふ例も尠くない のである。

次に、日星も多い眼疾である。之等も毒素が眼球へ集溜、瞳孔表面に固結するのであるが、放任しておけば大抵は治癒するのである然し此際、點眼藥を施すに於て、固結はより硬度になるので、非常に治り難くなるのである。私が治療の經驗によると、全然、點眼をしない患者は二三回にて容易に治癒するが、點眼をした患者程、治癒は困難になり、長引くのである。

右の外種々の眼疾は、何れも淨化作用による毒素の眼球に集溜するのが原因であつて、その毒素の性質と集溜狀態、眼球の集溜個所等によつて、症狀に差別がある譯で、最も恐るべき底翳は、眼球裏面に毒素が凝結する事は、醫學に於てもよく知られてゐる所である

そうして底翳には白底翳、青底翳、黑底翳の三種があつて、黑底翳が最も惡性とされてゐる。卽ち白底翳は白色の膿であり、青底翳は青色の膿で、白色よりも惡性である。黑底翳は毒血である。發病後何等の療法も受けず直ちに本療法を施せば、大抵は治癒するのである。

次に、俗に鳥眼と稱する夜盲症及び醫學上絕對不治とされてゐる色盲は、其原因が靈的

であるから、病氣と靈の項目に於て說く事とする。右何れも本療法で全治するのである。

次に、悲しくもないのに、涙が自然に出る人がある。此原因に就て醫學では涙囊又は涙腺の故障としてゐるが、私の研究によれば、殆んどは點眼藥の爲である。點眼藥をして數年を經ると、其藥液が涙に變化して排泄せらるるのであるから、放任しておけば、點眼しただけの藥液が排泄されて治癒するのである。

一〇、耳鼻疾患

耳の病氣としては、中耳炎、耳鳴、耳垂、聾耳等であらう。中耳炎は屢に說いたから省くが、耳鳴は醫學上原因不明で、治療の方法は無いとされてゐるが、本療法では、如何なる耳鳴も必ず治癒したのである。そうして、原因としては、內耳又は內耳に近い頭腦部、頭顱部及び延髓部耳下腺等に毒素溜結し、それが緩漫な淨化作用によつて溶解する。その音響がひびくのである。そうして耳下腺部に於ける毒素溜結が最も多く、殊に面白いのは

延髓部の原因も多いので、一見、耳に關係のないと思ふ局所であるが、そこを治療するに於て能く治癒するので、之は、患者も施術者も意外に思ふ事がある。然し乍ら、耳鳴は放任しておけば大抵は治癒するものであるが、但だ長年月かかるので、患者は煩悶し迷つて種々の療法を試みるが、殆んど効果はないやうである。

次に耳垂は、淨化作用による淋巴腺部の毒素が、耳下腺を通じて排泄せらるるのであるから、放任しておけば自然に出るだけ出て、必ず全治するものである。然るに醫療は、藥液にて洗滌するが、實に誤れるも甚しいので排除さるべき毒液が外耳に滯溜した場合、それは洗滌してもしなくても同じ事である。丁度、齒糞を掃除しても食事をすれば、直ぐに元通りになると同じ樣なものである。然し、唯だ洗滌だけならいいが、その藥液が粘膜から浸潤して毒液に變化し、排泄されるのである。卽ち、排泄した毒素を洗ひながら新しく毒素の原料を追加するといふ譯であるから、毎日洗滌に病院へ通ひ、三年も五年も經つても治らないといふ患者がよくあるが、それは右の理によるからである。そういふ患者に對

し、醫療を停止させ、放任させるに於て、數ヶ月にして自然に治癒した例を、私は屢々經驗したのである。

次に聾耳は、先天的と後天的とあり、又、病的と靈的との區別がある。靈的の方は後に說く事とするが、病的だけを說いてみよう。之は然毒が耳下腺から內耳へかけ、聽感神經部に固結して、その神經機能を抑壓し、無力にするので、これは非常に治り難いのである然し、固結の强弱と、固結部の位置によつて治り易いのと治り難いとの差別がある。ここに注意すべきは、醫療に於ては歐氏管通風をよく行ふが、これは非常に危險である。此方法で、輕微の聾耳が全聾になつた例を、稀にみるのである。そうして之は、如何に治療しても聊かの効果もなかつたのである。

次に、精神病患者に、よく幻耳といつて、附近に人が居ないのに、種々の聲が聽える事がある。之は、耳の病氣ではなく靈的であるから後に說く事とする。

次に、鼻の病氣としては、蓄膿症、肥硬性鼻炎、鼻茸、無嗅覺等あるが、原因は何れも同一であつて、鼻の兩側に溜結した毒素及び後頭部特に延髓附近に溜結した毒素及び前頭部より前額部にかけて溜結せる毒素が、淨化作用によつて鼻孔から鼻汁となつて排泄せらるるのである。卽ち、蓄膿症は、鼻の兩側の皮下に於ける毒素の溜結が原因であつて、これは指頭で壓すれば痛みがあり、この痛みの强弱によつて、重輕の差が判るのである。これは放任しておけば、この毒結は溶解、鼻汁となつて出て治癒するのであるが、醫療は藥液で洗滌するから、耳垂の際の洗滌と同じく藥毒が浸潤、追增することになり、慢性になるのである。又、肥硬性鼻炎は、鼻汁に含まれてゐる毒素が、粘膜を刺戟するので加答兒を起し、微熱を生じ、小腫物、痛み、痒み、淵き等の症狀をおこすのであるが、これ等も氣永に自然療法によれば治癒するのである。次に鼻茸は、私は醫者でないから、手術をしたことがないのでよく判らないが、膿の固結したものではないかと惟ふ。兎に角私の治療によつて鼻茸が發生しなくなるのにみても、そうであると想ふのである。

そうして、蓄膿でも鼻茸でも手術をするが手術によつて一旦治癒したやうでも、遲きは

二三年、速きは半年位で再發するので、此事實は眞の治癒ではなく一時的効果に過ぎない事が判るのである。特に蓄膿症に於ては、鼻側に集溜する毒素を手術によつて排除するが一時排除しても再び集溜するのである。故に完全に治癒させるには、集溜すべき毒素發生の根源を衝かなければならないが、醫學ではそれが不可能の爲、末稍的方法を執るのやむを得ない譯であらう。

又、近來蓄膿の手術によつてよく生命を失ふ事を聞くが之は如何なる譯であらうか。實に危險千萬である。全く手術の過誤による事は勿論であるが、專門家に於ても大いに研究されん事を望むのである。

次に無嗅覺の原因は、鼻の尖端に毒素溜結し、それが嗅覺神經への刺戟を遮斷する爲と後頭部下邊の凹所に毒素溜結の場合とある。そうして後者に於ては痲睡劑使用の結果又は瓦斯中毒等によつて鼻孔から吸收したその毒素が、右の局所に溜結する爲による事も稀にはある。そうして前者は非常に治り易く多くは二三回の治療で大抵は治癒するが、後者の場合は、相當日數を要するのである。

次にコカイン中毒であるが、之は最初鼻孔閉塞に對してコカインを吸收すると、鼻孔が開き爽快を感ずるので、終に一種の癖となり中毒となるのであるが、之は慢性の結果、究極は頭腦を害し、死に迄到る事があるから注意すべきである。

次に咽喉疾患であるが、感冒の際の咽喉疾患は感冒治癒と共に解消し、說く必要がないから咽喉結核を說く事にする。之は最初淋巴腺結核が漸次擴充移行し、遂に喉頭部から發聲機能に迄及ぶのである。之は私の治療の頃確實に全治したのであるが、醫療に於ては不治とされてゐる。そうして重症になるに從ひ口腔閉塞し水さへ通らぬやうになつて衰弱死に到るのである。然乍ら何故に淋巴腺結核が喉頭結核にまで發展するかといふと、それは初め淋巴腺附近に固結を生じ、淨化作用が起るや極力淨化抑止を行ふので還元固結するから、淋巴腺へ集溜すべき後續毒素が集溜し得ないで其隣接部へ集溜し、漸次移行して喉頭部迄犯す事になるのである。然るに最初淋巴腺部に固結發生し淨化の發つた場合、放置し

ておく時は漸次膨大し終にそれが發熱と共に倍々腫脹膨大し紅潮を呈し、丁度トマトの如くなるのである。此際醫師は大抵手術を行ふが、其手術は非常に悪いのであつて手術の爲に折角集溜しつつあつた深部の毒素の集溜が停止されるので、手術によつて排泄されたと思ふ毒素は全部ではなく必ず若干は殘存するのである。其證左として手術によつて一旦治癒しても其局所に永く痛みが殘り、又は隣接部に間もなく亦腫脹が出來るにみても明かである。斯ういふ誤療によつて生命を失つた患者の實例を書いてみよう。それは四拾歳位の男子であつたが、最初、淋巴腺部に固結が出來、それが發熱と同時に腫脹し初めた。それで早速、專門の病院で手術を受けた。手術の疵が治癒しない中、隣へ腫脹が出來、それを復手術した。復隣へ出來た。また手術した。そうする中、最初右だけであつたのが、今度は左へ出來た。又手術し、また出來るといふ具合で、そんな事をしてゐるうちに段々衰弱した。そうして右の如く、極力淨化作用の抑止をするので、毒素は外部への排泄作用を止めて、畢に内部へ集溜膨大するやうになつた。それは口腔内から咽喉へかけて腫脹甚しく終に咽喉部は腫れ塞がり、呼吸不能となつて生命を失つたのである。

然るに、如何に腫脹が膨大しても、猶放任しておく時は、漸次赤き球狀となつてブラ下るのである。丁度此際は赤き風船が下つてゐるやうである。斯うなると間もなく自然に穿孔され、膿汁は驚く程多量に排泄されて、非常に速かに治癒するのである。そうして斯樣にして治癒すれば、何等痕跡が殘る事がないのみか、全部排毒されるから再發はないのである。然るに手術で治癒した場合、必ず痕跡卽ち、生涯醜い引吊りが殘るのである。之によつてみても、自然療法が眞理である事を知るであらう。

又肺結核の末期に、よく喉頭結核が起る事があるが、之は悪性で治癒し難いのである。それはその頃は衰弱が極度に達してゐるからであつて、醫家に於ても、右の如き場合、最後の宣告を下すのである。

一一、齒槽膿漏及び顏面痳痺

近來、多い病氣として齒槽膿漏がある。之も醫學では未だ原因不明とされてゐるが、私

の研究によれば、根本は腎臓からである。腎臓から發生した尿毒が肩部に集溜し、尙進んで頸部淋巴腺附近に移行する。それが淨化作用によつて、齒齦から浸出排泄されようとするのである。其際血液も混るが、それは尿毒が血液中に混入して排泄せらるるのである。私が治療の際、腎臓、肩部、淋巴腺部及び頰齒齦の周圍等を外部から治療するに於て、悉くの患者を全治したのにみて、明かである。

齒槽膿漏の爲、齒齦が緩み、ブラブラすると拔齒するが、之も非常な誤りである。そうして齒科醫は、齒に原因があるやうに思ふが之は逆であつて、齒は關係がないのである。齒が緩むのは、齒根に毒素が集溜したからである。故に、齒槽膿漏を治癒するには、每朝毛の硬い楊子で齒齦を擦し、血膿を出來るだけ排泄すれば、必ず治癒するのである。又昔の人が行つたやうに指の腹へ鹽をつけて齒齦を磨くのも同一の効果があるのである。

次に、顏面神經痲痺といふ病氣がある。之は口脣の左右孰れかが引吊り、又は眼が引吊り眼球が飛出すやうなのがあり、實に容貌醜怪にして、重症は視るに堪へぬものがある。

然し放任しておけば大抵は數十日又は數ヶ月にして治癒するものである。然るに此際醫療は電氣療法を行ふが、之は惡いのである。何となれば此病氣の原因は、顏面の一部又は數ヶ所に毒素が溜結し、筋肉の屈伸を不能にするのであるから、電氣療法は毒素をより固結させるからである。然乍ら、自然療法によれば右の毒素は緩慢なる淨化作用によつて鼻汁喀痰、目脂等によつて排泄され、治癒するのである。

又、顏面神經痛といつて、顏面の左右孰れかが痛むのがある。然し、之もその痛む個所に溜結した毒素が、淨化作用を起すのであるから、自然療法によつても治るのである。

一二、　肝臟及び黃疸と結石

肝臟病に就て說いてみよう。醫療に於て、肝臟病と名付けるものは、大抵は肝臟は異常はないのである。それは肝臟の外部に溜結した毒素が肝臟を壓迫するので、之が其部の痛苦又は黃疸等を起すのである。醫師の診斷に於て、よく肝臟が腫れてるといふが、實は、

肝臟外部に溜結せる毒素の塊を誤つて肝臟が腫れてると思ふやうである。故に、右の毒結を溶解するに於て容易に全治するのである。

次に、毒結の爲、肝臟が壓迫される場合、その奥にある膽囊も自然壓迫を受けるから、膽囊内にある膽汁が溢出する。それが黄疸の原因である。故に、右の毒結を溶解するに於て黄疸も容易に治癒するのである。但し、毒結の位置は重に肝臟の上邊部である。

次に、膽石病がある。之は人も知る如く激烈なる痛みで、之は膽囊部の痛みと、結石が輸尿管を通過する際の痛みとある。近來、此結石を除るといふ巧妙なる方法が發明されたといふ事であるが、結石を除るだけでは、完全に治癒はされないのである。それは出來た結石を除ると共に、新しく結石が出來ないやうにしなければならないが、それは醫學では未だ不可能であり、原因も判つてゐないのである。

私の研究によれば、結石の出來る原因は、腎臟の尿毒が脊面卽ち膽囊の裏面から浸潤するのであつて、それが膽汁と化合して結石となるのである。故に右側の腎臟部の毒結を溶解するに於て、結石の發生を見なくなるのである。又本治療によれば結石は崩壞され、砂となつて尿と共に排泄せらるるのである。

又、腎臟及び膀胱結石は、膽囊結石が流下停滯し、尿素によつて增大されるのである。

一三、リョウマチス

此病氣も相當多いのであるが、之も勿論、淨化作用によつて、手足の關節に毒素が集溜し、紅く腫脹するのである。最盛期は實に激烈な痛みで、其際些かでも手足を動かすか、或は物が觸れると飛上る程痛むので、醫療に於ては、ギプスを以て患部を動かぬやう物に觸れぬやうにして固めるのである。卽ち、固まれば痛みは無くなるからである。大抵、固まるまで二三ヶ月を要するものである。然るに固まると同時に、關節は棒の如く不動となり、從而屈伸不能にて、不自由此上なしである。右の如く不動にしてからマッサージによつて、幾分でも動かそうとするのであるが、効果は殆んど無く、單なる氣安めに過ぎない

のである。以上の如き經過が、醫療に於ての普通の狀態である。

然るに、本療法によれば、最初の發病時、激痛の際なれば、四五回の施術によつて完全に治癒するのである。殆んど信じ難い程の偉効である。又醫療其他によつて、棒の如く固めたものは相當の時日を要するが、必ず治癒するのである。そうして固まつた程度に應じて、治療日數に差異のある事は勿論である。ただ手術を行つたものは、その手術の方法によつては、治癒し難いのもあるのは、止むを得ないのである。

一四、癌病

癌に關係した病氣の多い事も、周知の事實である。そうして此病氣は他の病氣と異なりその原因が膿ではなく癌特有の毒素であつて而も人体の如何なる部分卽ち筋肉でも骨でも臟器にでも遠慮なく移行擴充するといふ、實に恐るべき病氣である。醫學上無菌とされてゐるのも、膿ではないからである。そうして其病種も多種多樣であつて、重なるものとしては胃癌、食道癌、喉頭癌、子宮癌、乳癌、肝臟癌、肺臟癌、腸癌、舌癌等で、稀には、頰癌、顎癌、痔癌等もある。近來、醫學に於ては、癌にも數種ありとされてゐるが、私の研究によれば、種類は醫學でいふよりも多いやうである。又、進行性と不進行性とがあり進行性の中にも特に進行速かで、短時日に、胸部、腹部、背部等上半身の大部分に迄、擴充するものもあり、之等は最も惡性である。これに反し不進行性は局部的であるから、治癒は容易である。然し乍ら進行性と雖も、最初は一局部に限定され、末期に到つて進行性に移るのも多いのである。

又、醫學上、肉腫と名付けられたる病氣がある。之は癌に酷似してゐるが、指の觸感で癌との差別は判るのである。玆に、注意すべきは擬似癌が尠くないので、醫學上、癌と診斷された患者で、私が診て擬似癌である事が相當あつたのである。そうして本治療によれば、癌も肉腫も八十パーセントは完全に治癒し、擬似癌は百パーセント治癒したのである。私が治療の際治らなかつたのは、患者が餘りに衰弱してゐる爲、癌を解消させるまで、生

命が保てなかつた爲であるから、最初からの治療によれば、その成くが全治したかも知れないと意ふのである。

右の如くであるから、醫學が非常に高價なるラヂユウムを海外から輸入するのは、國家經濟上見逃す事の出來ない無益な浪費であると思ふのである。

一五、痔疾患

日本人特有の病氣に痔疾患がある。此病氣症狀も種々ある事は、世人が知る通りである。其中最も多いのは脱肛であらう。之は、醫學でも言ふ通り、日本の便所の構造が悪い爲も確かにある。そうして脱肛は、排便方法によつて治すのが一番良いのである。それは、便所の時間の長いのが、最大原因であるから、之を生づ短縮する事である。卽ち排便が有る無しに關はらず、一回を五分以内とすること但し、一日何回でも差支へない。此方法を一二年續くるに於て、必ず治癒又は輕快するのである。又今一つの原因は便秘による硬便で

あるが、之は本治療を施せば容易に治癒するのである。

次に、疣痔は、放任しておいても長時日によれば治癒するが、如何なる重症であつても本治療によれば短時日で全治するのである。又出血、搔痒症等もあるが、之等も放任しておいても、自然治癒するのである。

又世人に非常に怖れられてゐるものに痔瘻があるが、之は決して怖るべき病氣ではないのである。最初から放任しておけば、長時日膿が排泄されて必ず治癒するのである。然るに、之を知らない世人は、醫療によらなければ治癒しないと思ふのであるが、醫療は、排膿孔を手術によつて閉塞するので、膿は隣接部から穿孔排膿する。それを又閉塞する。復穿孔するといふやうに繰返すに於て、遂には蜂の巣のやうになる。而も、之に藥毒が加はるから激烈な痛苦を伴ひ、頗る悪性になるのであるが、本療治によれば、如何なる難症と雖も完全に全治するので、痔瘻は、私は、治りいい病氣と常に言つてゐるのである。そうして世間よく痔瘻を手術すると肺病になり易いと謂はれるが、之はどういふ譯かといふと

元來痔瘻の原因は、輕症なるカリエスの如きものであつて、その膿が肛門から排泄する譯であるから、肛門の排泄口を閉鎖すればその膿は肋膜又は肺臓内へ浸潤し、喀痰によつて排泄されようとするーそれが肺病になるといはれる譯である。

そうして、痔の出血を世人は恐るるのであるが、これは淨化作用による濁血の排泄であるから、反つていいのである。丁度、赤痢の血便と同様な意味であつて、後頭部の重い症狀や、首肩の凝りが、痔出血によつて治癒する事がよくあるのである。

一六、脚氣

此病氣も、日本人特有の病氣であつて、原因は、醫學で唱ふる如く白米食である事は言ふ迄もない。故に療法としては、最も簡單なのは七分搗きの米食になし、副食物を成可く多く攝るやうにすれば速かに治癒するのである。又、他の方法としては米糠を食後、茶を飲む時に、普通の匙に一杯乃至二杯位づつ服めば、大抵は一週間位で全治するのである。

其際、米糠は煎る方が香ばしく、飲み易いのである。脚氣の痳痺は、私が掌で十分乃至二十分位擦つただけで、大抵は治癒するのであるにみても、最も治り易い病氣である。

一七、花柳病

花柳病といへば、醫學上硬性下疳卽ち梅毒及び軟性下疳及び淋病の三種とされてゐる。然し、近來今一種發見されたとして居るが、玆では三種だけの說明で充分と思ふ。

硬性下疳は醫學上スピロヘータなる黴菌によつて、不潔なる行爲から感染するとされてゐる。そうして現今、驅梅療法が進歩したと謂はれてゐるが、曩に述べた如く驅黴療法による藥毒そのものの方が、寧ろ黴毒よりも惡作用をする事で、之は世人は知らないのである。私は專門家に對し此點を大いに研究されたいと思ふのである。勿論右の藥毒は、六百六號は曩に述べた通りであるが、其他の水銀療法や沃度療法の藥毒の害も、輕々には出來ないのである。

然し、私が意外に思ふ事は、本療法によれば、黴毒は實に容易に治癒する事である。故に、その毒素は、醫學で唱ふるやうな執拗な性質ではないと思ふのである。そうして醫學上、黴毒は遺傳を恐れられてゐるが、私は黴毒は遺傳はしないと信ずるのである。之に對し專門家に於て、今後一層の研究をされる事を望むのである。

次に、軟性下疳は放任しておいても治癒する位のものであるから説明の必要はあるまい勿論、醫學に於ても輕病とされてゐる。

次に、淋病は、私は寧ろ黴毒よりも惡性と思つてゐる。此病氣は醫學上でも全治し難いとされてゐるが、全くそうである。然し、私の實驗上、醫療は大いに誤つてゐる點があるそれは尿道口から藥液を注入する事である。卽ち、淋菌ゴノコッケンを深部へ押込むといふ結果になり易いので、餘程熟練の醫師でない限り、そういふ事が相當あり得ると思ふのである。特に看護婦などが行ふ場合、あり勝ちであらう。右の結果は、攝護膜炎や睾丸炎を起し易いので大いに注意すべきである。私は淋病へ對し、水分を出來るだけ飲むやう奬めるのである。それによつて尿の排泄が多くなり、尿道は自然頻繁に洗淨される事になるから、結果は頗る良いと共に、淋菌が深部に移行する危險もないといふ一擧兩得である。又その場合、松葉を枝つきのまま煎じて服む時は、一層の効果がある。何となれば松脂の粘着力が、淋菌の繁殖を阻止するからである。

次に、攝護腺炎及び睾丸炎等も、自然療法がいいのであるが、本療法によれば、簡單に全治するのである。

一八、　精神病及び癲癇

精神病と癲癇は洵によく似てゐて、共通的のものであるが、又異なる點もあるのであるそうして此孰れもが、全然靈的原因によつて發病するのであるから、如何に体的、唯物的療法を行ふと雖も効果がある筈はないのである。故に、之は、靈的病氣の項目に詳説するが、その原因が全く靈的である事が判明するに於て、唯物的研究が如何に徒勞であつたか

を知るであらう。

一九、婦人病

婦人病にも種々あるが、概略左に説いてみよう。

最も多いのは、子宮に關する病氣である。醫學では子宮内膜炎又は實質炎、周圍炎等の名稱を附してゐるが、炎のつく限り有熱病であるから、淨化作用が起つてゐるので、放任しておけば必ず治癒するのである。然るに子宮抓爬などを行ふが、之等は何の効果もない何となれば、元來子宮内は不斷に分泌物又は白帶下等が下りるから、抓爬するや、忽ちに舊の通りに汚れるからである。

次に、消渴であるが、之は淋毒性と今一つは、曩に説いた熱尿の爲などもあるが、淋毒に因る尿道疾患は、淋病の治療法と同しく、尿を頻繁にして、尿道を洗滌するのが一番いいのである。

熱尿は、曩に説いた通りであるから略すことにする。

次に、子宮筋腫も尠くない病氣で、その症狀も種々あるが、私の經驗によれば、誤謬が非常に多いのである。

眞の子宮筋腫は、子宮を索引してゐる筋が腫脹するので、大きさは大、中、小種々あり、多くは硬性で、無痛と輕痛とあり、無痛に於ては、永い間氣の付かない患者すらあるのである。又、誤診もあつて、鼠蹊腺部、腎盂炎、腹膜の下部等に凝結する毒素又は月經の殘存血液の凝結等を子宮筋腫と誤る事が少くないのである。之等を治療する結果、毒素の方は白帶下となつて排泄せられ、殘存月經凝結の方は月經となつて排泄せられるので、速かに治癒するのである。然し乍ら、眞の子宮筋腫は、自然治癒では困難であるが、本療法によれば、必ず治癒するのである。

次に、卵巣膿腫又は卵巣水腫も相當多い病氣で、之も割合苦痛はないのである。そうして重症になると非常に膨大し、臨月以上の大きさになるものさへあるが、苦痛がないから

右の如き腹を抱えて働いてゐる婦人もよくあるのである。そうして腹部の膨大は、腹膜炎とよく似てゐるが、異なる點は、腹膜炎は胸部へかけて、膨滿が斜狀型になつてゐるが、卵巣膿腫は、胸部は常態にして、腹部のみが際立つて膨滿してゐるからよく判るのである

そうして此病氣に對し、手術は割合奏効する事が多いのである。又子宮筋腫も、手術の奏効する事が多いのである。

次に、婦人病に對し、醫家は診察の結果、よく喇叭管が腫れてるといふが、之は誤診であると思ふのである。それは醫家の診斷は、內部からみて腫れてるといふが、實は外部卽ち下腹部に毒素溜結し、それが外方から壓迫するので、內部からはそうみゆる爲であらう

次に、婦人によくある病氣に月經痛がある之は月經毎に多少の痛みを感ずるのであるがそれは喇叭管が狹小又は閉塞してゐるので、それを血液が通過しようとする。その爲の痛みである。そうして原因は、前述の如き、外部からの溜結毒素の壓迫であるから、その毒素を溶解するに於て全治するのである。私が治療の頃、例外なく治癒したるにみても明か

である。

次に、成年期になつても無月經の女性がよくあるが、之等は喇叭管閉塞が强度である爲であるから、その原因を除けば必ず治癒するのである。

又不姙症も右と同一の原因であつて、醫學で唱ふる如く、喇叭管閉塞の爲である。故に昔から、下腹が固い女性は不姙であるとか、又あの婦人は下腹が固くなつたから、もう子が出來ないなどとよく謂はれるが、之は眞實である。

次に、姙娠中の病氣として姙娠腎が相當多いのである。そうして强度の浮腫の爲、醫家は人工流產を奬めるが、此姙娠腎發生は、多くは七八ヶ月以後であるから、寧ろ流產でなく死產であるといつてもいいので、實に本人及び家族の精神的苦痛は大である。そうして此原因は、平常から脊面腎臟部に毒素溜結があり、後部だけなら其壓迫も輕度で氣が付かないが、一度姙娠するや、腹部の方からも壓迫するので、腎臟は、前後からの壓迫を受け强度の萎縮腎となり、それが爲、餘剩尿が浮腫となるのである。

然し乍ら、本治療によれば、此症狀は特に治癒し易く、短時日に快癒するので、決して人工流產等の必要がなく、順調に出產するから、大いに喜ばれると共に、國家的見地からいつても、大いに推奬すべきであると思ふのである。

次に、姙娠中の惡阻も頗る多い症狀で、甚しきは嘔吐激しく、一ヶ月以上も碌々食を攝る能はず、人工流產のやむなきに至るのであるが、此原因は胃の外部にある毒素溜結が、腹部膨脹によつて壓迫され、淨化作用が發つて溶解し排泄される。それが嘔吐であるから右の毒素を溶解するに於て治癒するのである。

次に、子宮外姙娠もよくある症狀で、且つ非常に恐れられてゐるが、之は醫學に於ては手術以外方法がないとされてゐる。然し乍ら本療法によれば、頗る容易に治癒するのである。又此症狀も誤診が會々あるやうであるから注意すべきである。そうして此症狀は、姙娠二三ヶ月頃、下腹部の激痛と出血が著るしい特徴である。

次に、白帶下の多量にある女性があるが、醫學に於ては之を不可として種々の療法を行ふが、何れも効果はないのである。又子宮が惡いからといふが、之は子宮とは全然關係がないので、只だ深部から溶解毒素が流下し、一旦子宮内に滯溜するのであつて、誤解も亦甚だしいのである。從而、其際に於ける子宮抓爬などは意味をなさないのである。私の研究によれば、此原因は化膿性腹膜炎が、淨化作用によつて溶解され、その膿が排泄さるるのであるから、白帶下は非常に良いのである。

其他バルトリン氏腺腫脹、膣炎、搔癢症、子宮脫出、不感症等あるが、之は省く事とする。

二〇、小兒病

最後に、小兒に特有な病氣を概略説明してみよう。それは先づ疫痢、痳疹、百日咳、肺炎、喘息、脫腸、小兒痳痺、ヂフテリヤを重なるものとし、其他種々の病氣がある。

疫痢は、小兒に最も多く、且つ最も恐るべき病氣とされてゐる。今迄何等異常のなかつたものが、突如として元氣喪失し、盛んに欠伸をなし、又は眠がり、眼に力がなく、食慾

も皆無となり、多少の發熱もあつて嘔吐があれば、先づ疫痢と見做して差支へないのである。そうして重症に於ては、瀕繁なる嘔吐、痙攣、眼球の引吊り等があつて、早きは拾數時間にして生命を落すのであるから恐ろしいのである。そうして此病氣の原因は、急激な淨化作用であつて、その毒素は最初胃に集溜すると共に腦を犯すのである。幸ひ生命を取止むるとして、一二日を經て、下痢によつて毒素が排泄さるるのであるが、下痢が起れば最早生命の危險はないと思つていいのである。醫療に於ては、近來注射療法を重に行ふが之は成績頗る惡しく、恐らく九十パーセント以上は結果不良であらう。而も、最も不可である事は、發病するや直ちに蓖麻子油の服用をさす事である。何となれば、毒素が胃中にある時服用させても、蓖麻子油は、右の毒素をそのままにして通過し、腸に入つて腸内の殘存物及び宿便を排除するに過ぎないからであると共に、不自然な手段によつて腸を害するからである。

私が治療時代、疫痢は例外なくその悉くが全治したのである。而も施術は一二回である

から、その日又は翌日は快癒し、平常と異ならないまでになるので、その速かなる偉効に近親者は驚歎するのである。然るに其際、蓖麻子油の服用又は注射をしたものは、それだけ治癒が後れるのである。そうして、本治療に於ても、發病後半日以内ならば必ず治癒するが、拾時間以上を經たものは治癒困難な場合がある。

痲疹

此病氣は、他に異常がないのに、數日間發熱が持續して、それから發るのが普通である之は生理的淨化作用であるから、放任しておいても大抵は治るのであつて、一時に發疹する程いいのである。此際外出したり、風にあてたりすると、發疹を妨げるから良くないので注意すべきである。そうして痲疹そのものは危險がないが、斃れるとすれば餘病卽ち肺炎によつてである。其他の餘病としては中耳炎、血膜炎等である。然し、之等も放任しておけば殆んど治癒するのである。

之も、本治療によれば、一回の施術によつて全身的に發疹し、二三日で全治し、餘病など決して發らないのである。

百日咳

百日咳も多い病氣であつて、强烈な持續的咳嗽によつて、白い泡の如きものを嘔吐するので、それが百日咳の毒素であるが、此先天的毒素を全部体外へ排泄するのに百日位かかるので百日咳といふのである。そうして右の如く、强烈な咳嗽及び嘔吐の場合、その苦悶の狀、見るに忍びざる程で母親は痛心するのである。又百日核の特徴は、咳嗽の際、息を引く時に、一種の音を發するのである。醫療に於ては、咳嗽を止める事に腐心して、毒素の排除を止めて固めようとするが、之は實に誤つてゐるのである。萬一醫療の目的の如く毒素が固まつたとすれば、何れはそれの淨化作用が起る―それが肺炎又は喘息となるのである。小兒喘息は右の原因が多いのである。

私の治療の時は、十日乃至二十日位で、殆んど全治したので、私は百日咳ではなく、十日咳であるとよく言つたものである。

喘息

小兒喘息は、前項の如き原因が多いのであるが、その他の原因としては遺傳である。そうして小兒喘息は、その殆んどは横隔膜邊から胃及び肝臓の外部へかけての毒素溜結であつて、之は放任しておけば、成人するに從ひ自然治癒するものである。又、背部に溜結毒素があり、その淨化作用による事もある。

肺炎

小兒の肺炎は、百日咳を固めた結果と、痳疹の場合と、肺臓の周圍又は其一部に集著せる毒素の猛烈な淨化作用とである。特に小兒に於ては呼吸逼迫、喘音、不快感等が著るし

いので、近親者は恐怖し、痛心するのである。然し、醫療に於ては、凡ゆる淨化作用停止方法を行ふから、不良の結果が多いのである。寧ろ放任しておいた方が、治癒率は多いであらう。本療法によれば、一週間とはかからないで、完全に治癒するのである。そうして此病氣は、痰の排除されただけは輕快するのであるから、痰の排除を促進する療法であれば必ず治癒するのである。

脫　腸

此病氣も小兒に多いのであるが、老人にも會々あるのである。そうして此病氣は、人により輕重が甚だしく、輕症に於ては、成人するに從ひ自然治癒するが、重症は治癒が困難で、醫療に於ては手術をなし、輕症は脫腸帶を使用させるのである。此病氣の原因は腹膜部に於ける局部的毒素溜結が腸を壓迫する爲逸脫するか又は耻骨の左右の竇の何れかの方が先天的大きい場合發るのである。

重症に於ては、男子は腸の垂下が睪丸に迄及ぶので、そういふのは治癒が困難である。此病氣の手術は多くは結果良好であるから、私としても手術を推奬する事もある。そうして本療法に於ては、腹膜の毒素溜結を溶解し腸の活動を旺盛にさせるのであるから、相當の時日を要するが、殆んど治癒するのである。又脫腸帶は相當の効果がある。

其他の小兒病としては、濕疹、皮膚病、頭瘡、顏面瘡等もあるが、之等も自然治癒が最も確實である。特に顏面瘡の場合、眼球を犯され、甚しきは盲目となるかと疑はるる程のものもあるが、之等も自然によつて完全に治癒するのである。

又、生れて間もなく嬰兒が急に食慾減退すると共に嘔吐をする事がある。そうして嘔吐の際血液が混じてゐる事がある。之は如何なる原因かといふと、嬰兒が母体から出生の際古血を飲下し、それが時を經て排泄されるのであるから、全部排泄されれば平常の如くなるのである。然るに、原因を知らない醫師も母親も、病的吐血と誤解し、愕くのであるが之は心得ておくべきである。

其他の症狀としては、不機嫌、不眠、憤かり、腦膜炎等であるが、之は曩に述べたから略する。以前私が經驗した病氣に面白いのがあつた。それは抱くと必ず泣くといふ嬰兒である。それはよく診査すると、肋間神經痛があつたので、抱くとそこを壓迫するから痛むそれで泣くのであつた。故に、其部を治療するや忽ち全治したのであつた。

小兒痳痺も多い病氣であるが、之は靈的原因であるから、後篇に詳しく說く事とする。

ヂフテリヤも右と同樣であるから後篇に讓る事とする。

次に、小兒の便通に對しよく灌腸を行ふが之は大いに不可である。灌腸の結果、逆作用を起し、便秘する事になる。便秘するから、灌腸を行ふ。灌腸を行ふから便秘するといふやうになるので、之等も、反自然の爲である。爰に面白い事は、灌腸に因る便秘は、肛門の口許が秘結する事で、此事によつてみても、灌腸の爲の秘結がよく判るのである。人間は生れながらにして、自然便通があるべく造られてあるのであるから、灌腸などの必要はないのである。もし灌腸をしなければ便通がないとしたなら、昔の小兒はどうであつたらうか。昔の小兒は便秘であつたといふ事を、誰も聞いた者はあるまい。全く、現代醫學の理念は解するに苦しむのである。

私は、幾人もの腹部が腹膜炎の如く膨大した兒童を扱つた事がある。それは生後間もない時から、灌腸によつて便通をつけ、それが癖になつて、灌腸を行はなければ絕對に便通がないといふやうになり　其結果漸次、腹部が膨大したのである。そうして、灌腸によつて便通をつければ幾分縮少するがそうでないと膨大するのである。これによつてみても、如何に灌腸が有害であるかを知るであらう。

腎臟醫術と若返り法

本療法は一言にしていへば腎臟醫術といつてもいいのである。曩に詳說した如く病氣の原因としては然毒、尿毒、藥毒の三種であるが、その三毒が最も作用する局所としては、腎臟に如くものはないのである。先づその順序を說いてみよう。

人間が此世に生をウけるや、先天性毒素として最も病原となるのは然毒であるが、それは先づ最初、背面腎臓部に集溜するのである。勿論、嬰兒と雖も大抵はそうである。從而世間よくある起歩きの後れる幼兒は、右の如きが原因であるから、それを治療する事によつて容易に治癒するのである。そうして人間は成人するに從ひ、腎臓部に三毒素溜結し、漸次固結が增大するので、その壓迫によつて腎臓は萎縮し、曩に說いた如く餘剩尿が滲出し、右の固結に追增するのである。從而、腎臓は益々壓迫されるから、それだけ餘剩尿の增加となり、愈よ固結が增大するのである。其結果として餘剩尿は漸次的に背部脊柱の兩側に向つて移行集溜し、尙上昇して肩の凝りとなり、頸部の周圍より頭腦は勿論、眼、耳鼻、齒齦、咽喉部等に及ぶのである。又人により胸部の周圍、腕の付根、胃部、肝臓部、腹膜等にも及び、尙下降して脚部にまで及ぶものである。此場合勿論神經集注個所程集溜する事は曩に說いた通りである。

斯の如く、腎臓障碍が原因となつて、凡ゆる病原となるのであるから、何よりも先づ、

背面腎臓部の固結を溶解除去しなくてはならないのである。斯くする事によつて凡ゆる疾患は治癒に向ふのは當然である。

玆で、平均淨化作用に就て知つておく必要がある。それは毒素溜結せる一局所を溶解除去するに於て、他の毒素溜結部は右の淨化狀態と同樣の狀態に平均すべく、自家淨化作用が發生するのである。勿論自家淨化作用であるから、發熱又は痛苦を伴ふのである。從而根幹的原因である腎臓部が淨化さるるに於て枝葉的に他に分搬せられある毒素は、平均的自然淨化によつて、全身的に疾患が治癒さるる事は必然である。此理によつて、腎臓の活動を促進さす事こそ、凡ゆる疾患を治癒させ健康を增進させる唯一の方法である。

故に、腎臓部の障害が除かれ、活動旺盛になるに於て、幾多の好影響が表はれ始めるのである。その最も著しき現象としては若返る事である。少くとも拾年乃至二拾年は若返るのである。それは如何なる譯かといふと、腎臓なる機能は尿によつて体內毒素を處分する以外、ホルモンを製出するものであるからである。今日醫學に於てホルモンを外部から注

射等によつて注入するが、之等は一時的効果に幻惑させるのみで、反つて腎臓を弱らすのである。丁度外國品を輸入する爲、國内工業が萎靡するのと同様である。此意味に於て、輸入品よりも遙かに優秀なる國産ホルモンを無限に製出なし得る本療法の効果は、

實に偉大なるものと思ふのである。

右の結果として、元氣旺盛となるは勿論、爽快感が湧出し、樂天的となり、人生觀は一變するのである。從つて、怒り、癇癪、短氣等の性格は消へ、親和協調的となり、愉快に仕事に從ひ根氣が續くやうになるから、能率が非常に增進するのである。斯様な事をいふとあまりに牡丹餅で頬邊をたたかれるやうであるが、私は些かの誇張もない事を斷言するので、何人と雖も實驗をすれば詐りでない事を知り得るのである。故に、私は常に想ふのである。日本人の腎臓が健全になるとすれば、先づ何よりも能率增進によつて生産の增加となり、悲觀や憂鬱的人間が減少するから社會は明朗化し、人々は生活を樂しむやうになるのである。此意味に於て、此腎臓醫術こそ、百万語のお説教にも勝る心身改造法であるといつても過言ではないのである。

次に、平均淨化に就て、今少しく説く必要があらう。前述の如き平均淨化が次々起るに於て、丁度毒結のある個所を、身体が指示する如くであるから、毒素の在る個所は結局に於て全部判明し、全部治癒するのであるからそれによつて完全健康体となるのである。

次に、本療法を初めて受けたる患者が、翌日あたり、往々だるい場合があるが、それは治療した個所ではなく、治療しない個所に平均淨化が起るので、それは微熱であるからだるいのである。故に、前日治療しない個所を治療すれば、全く治癒するのである。

次に、近來當局に於て一般國民に對し「胸を張つて歩行せよ」といふのであるが、腎臓を完全にすれば自然的に胸を張るやうになるのである。故に若くして胸を張れないものや年とつて腰の曲るといふ原因は、悉く尿毒が背部又は腰部に固結するその爲であるから、今日如何に胸張り宣傳をすると雖も、腎臓を健全にしない限り、人爲的に無理を强行する事になるから苦痛となるので、一時的効果はあらうが永續性は乏しいものとみなければならないのである。

此點に於ても、我腎臓醫術の効果は大なりといふべきである。

本療法が一般に行はれるやうになるとすれば、現在國家が最も憂慮しつつある處の人口低下の大問題が解決なし得るといふ事である。

元來、不姙症は如何なる原因であるかといふと、全く前項に述べた如く、腎臓萎縮によつてホルモンの缺乏となり、ホルモンの缺乏は、性的劣弱化するのであり、それが姙孕力低下の眞因である。勿論女性ばかりではない。男性も同一である。特に女性にあつては萎縮腎の爲、尿毒が腹膜に固結し、喇叭管を壓迫し又は前屈後屈等、子宮の位置を變移する事によつて受胎に支障を及ぼすのである。

右の如くであるから、不感症や夫を忌避する女性等は、悉く萎縮腎の結果である。醫學に於て子宮の發育不全といふのも、勿論、萎縮腎が原因である。

故に、腎臓が健全になれば、必ず姙娠すると共に、夫婦相和し、家庭爭議や離婚等の忌はしき問題は著滅する事は必然である。

私は、自畫自讃せざるを得ないのである。本醫術を外にして、人口問題解決の鍵は絶對得られない事である。

本醫術の施術

本醫術は、腎臓醫術であるといふ事は、曩に説いた通りである。從而、施術の場合、頭腦、首、肩を治療し次に患者を俯臥させ、左右の腎臓部を掌と手指を以て、毒素の多少を探査するのである。今日の日本人で、此腎臓部に毒素の溜結のない者は一人もないといつてもいいのである。そうして此毒素は有痛と無痛とあるが、無痛が多いのである。そうして最も重要なる個所としては、脊柱と末端の肋骨との中間即ち三角形を描けば、その中心點にあたる所及その下方である。その部が柔軟で、手指で壓して凹む位ならば良いのであるが、そういふ人は恐らくないのであつて、大抵の人は廣範圍に固結しており、甚だしきは反對に隆起してゐる人さへあるのである。それは勿論、餘剰尿の固結であるが、それが上方に向つて脊柱の兩側に移行しており、特に肩胛骨と脊柱との間に多量の固結があるものである。此固結は、胃に關係があるので、之を溶解すれば胃の活動を促し、食慾は增進するのである。從而、胃病の患者に對しては、此固結溶解によつて好結果があるのである。

又、腎臓部より下方に向つて腰骨部まで毒結は移行してをり、特に腰骨に接觸して毒結のある場合、多くは脚部に異狀があるもので、之を溶解すれば、よく治癒するのである。

右の如くであるから、先づ腎臓部の治療を第一とし、肩胛骨部を第二とし、その他は第三の順位にすれば良いのである。又一般に、左側腎臓部の毒結が多いのであつて、右側のそれは少いのである。但し、盲腸炎の原因は右側の萎縮腎である。

そうして、腎臓部の毒結を溶解するに於て溶解毒素は腎臓内に浸潤し、尿と共に排泄されるのである。蛋白とは此溶解毒素であるから、此際の尿中には、多少の蛋白がある事は勿論である。從而、腎臓部の毒素溶解するだけは、体内のあらゆる病患は、平均的自家淨化作用の發生によつて、能く治癒するのである。又、腎臓部の毒素溶解は、他の局部の毒結溶解が容易となる事は嘉くべき程である。

又、腎臓の完全なる活動は、全身的淨化力が頗る旺盛となる事である。

故に私は、人間は腎臓さへ健康になれば、凡ゆる疾患は治癒すると共に、心身共に健全となり、幸福と長壽を得るのであるから、實に不可能とさへ想はれたる人類の理想が、茲に現實化したのである。

故に、此腎臓醫術の發見こそ、人類史上、空前の大發見であると、私は想ふのである。

次に、爰に注意すべき事は、化膿性腹膜の患者である。之は、腎臓部のみ治療する時は多くの場合、平均淨化が發生して腹痛を起す事があるから、斯ういふ患者に對しては、腎臓部と共に、腹膜部も治療しなければならないのである。

心臓醫術

腎臓に次いで重要なる機能は、何といつても心臓であらう。從而、本療法によつて心臓が健全になつた場合、疾患及び全身機能、精神的方面等に對し、如何なる好影響を及ぼすかといふ事を説いてみよう。

先づ、腎臓の餘剰尿が集溜する局所としては、肩胛骨と脊柱との間が多い事は曩に説い

た通りであるが、それは丁度心臓の裏面に當る所である。故に、此毒結が心臓を壓迫してゐる爲、心臓の活動が妨げられるのは當然である。そうして心臓の活動の强弱は如何なる影響を與へるかといふに、屢に說いた如く、人体に於て心臓は火であり、肺臓は水であり胃は土であるといふ原理によつて、それは次の如きものである。

先づ初め、心臓壓迫の毒素を溶解するに於て、心臓の活動が旺盛となり、其結果として火素の吸收が增加するから、水である肺臓の活動が强化されるのは勿論である。丁度水を溫める火力が强くなるやうなものである。從而、肺臓の活動が旺盛になれば、結核患者の肺臓內に固結してゐる毒素は、溶解排泄が速かとなるので、治癒が促進される譯である。又、肺臓の活動は胃の活動を促進するから、食慾は增進するので、兩々相俟つて非常な効果を擧げる事になるのである。

それぱかりではない、ここに見逃す事の出來ない事は、性格的に好變化が表はれて來るのである。元來、心臓なる機能は、熱の本源である關係上、性格的には愛の湧出する機能である。故に、心臓の活動力旺盛は、愛の情動が盛んになる事で、性格が一變する譯である。その例として、肺患者の性格は押並べて愛の熱が淡く、理性の方が勝つといふ事は、私が幾多の肺患者を扱つた經驗によつても、爭ふ事の出來ない事實である。それは心臓が弱い時は愛の熱が不足する。その爲、水が溫くならないといふ譯である。

此意味に於て、此心臓醫術によれば、肺結核の治癒は促進され、罹病者は減少するのであるから、結核問題解決に効果のある事は贅言を要しないのである。否結核問題解決は、之以外にない事を、私は强調するのである。

結　論

私は、現代醫學に對し、凡ゆる面から解剖し、忌憚なきまでにその誤謬を指摘し、批判を加へたつもりである。然し乍ら、歸する所その結論は左の如きものであらう。

一　病氣に對する醫學の解釋が、淨化作用である事を知らなかつた事。

二　從而、病氣を悪化作用と解し、淨化作用停止を、病氣治癒の方法と誤認した事。

三　藥劑はすべて毒素であつて、その毒素が淨化作用を停止するのみならず、その殘存藥毒が、病原になるといふ事を知らなかつた事。

四　病氣は淨化作用である以上、自然が最も良醫であるといふ―彼のヒポクラテスの言を無視し、すべて人爲的療法を可とした誤謬。

五　醫療は一時的効果を以て、永久的と誤解してゐる事。

大体右の如きものであらう。それに就て、右の内四までは詳説したから、讀者は充分諒解されたであらうが、但だ五に對して大いに解説する必要があると思ふ。

先づ醫療としての凡ゆる方法は、一時的治癒であつて、それを眞の治癒と錯覺してゐる事である。而も一時的治癒の方法が、其後に到つて逆作用を起させ、病氣悪化の原因となり、餘病發生の動機となるといふ事も知らなかつたのである。之に對し、種々の例によつて説明してみよう。

曩に詳説した如く、藥劑や氷冷、濕布等を行へば、一時的苦痛が輕減するので、之によつて治癒すると思ふのである。又耳鼻の洗滌胃の洗滌等や點眼藥、コカインの鼻注、含漱藥、すべての塗布藥、膏藥等も勿論一時的苦痛輕減法である。又下熱劑、利尿劑、下劑、睡眠劑モヒ注射等も同樣である。又、齒に對する含漱藥は齒を弱らせるし、殺菌劑應用の齒磨も齒に悪いのである。爰に面白いのは、齒科醫が齒孔をセメン等にて充塡する場合、殺菌劑にて消毒するが、之等も大いに間違がつてゐる。何故なれば、充塡後大抵は痛むものである。それは殺菌劑が腐敗し、毒素となつて排除されようとする。その爲の痛みである。故に充塡の場合、全然殺菌劑も何も用ひない時は、決して痛みは起らないのである。私は、齒科醫に嚴重にそうさせて以來、決して痛まないのが何よりの證據である。從而、齒科醫が斯事を知つて藥劑を用ひないやうになれば人々は如何に助かるであらうかと、私は常に思つてゐるのである。

又、仁丹なども少し位は差閊へないが、常用者になると害があるのである。以前私は、

仁丹中毒の患者を扱つた事がある。此人は拾數年間、常に仁丹を口に入れてゐたので、最初來た時は顏面蒼白で痩せ細り、胃も相當惡るかつたが、其原因が仁丹にある事が判つたので、大いに驚いて廢止し、其後漸次健康を恢復したのである。

次に、世人の氣の付かない事に、藥湯の中毒がある。それは元來風呂の湯は何等異物の入らない純粹の水が良いのである。然るに、藥湯の如き異物が混入すると、その藥毒が皮膚から侵入し、一種の中毒となり、健康に害を與へるのである。故に、藥湯に頻繁に入る人は顏色が良くない事を發見するであらう。そうして藥湯が溫まるといふ事をよく謂ふが之は如何なる譯かといふと、微熱のある人は常に輕い惡寒があるから寒がりである。然るに藥湯へ入ると、藥毒が皮膚から侵入するので淨化作用が停止し、一時的微熱が無くなるから惡寒がなくなり、丁度溫まるやうになるのである。又溫泉の湯花を入れるが、之等も溫泉へ入るのとは違ふのである。何となれば溫泉は山の靈氣が含まれてゐるから、それが身体に利くのであるが、湯花は靈氣が無くなつたーいはば滓であるからである。次に扁桃腺及び盲腸の手術は、屢に說いた如く、二三年の間は成績がいいが、其後に到つて惡い事や、又胃病に對し消化藥を腹み、消化し易い食物を攝るに於て、漸次胃が弱るといふ事や疲勞を恐れたり、睡眠不足を恐れるといふ事なども一時的を主とした誤りであり、榮養食も屢に述べた通りである。

故に、何よりも私の理論の誤りでない事は幾多の事實によつて知る事を得るであらう。彼の上流社會の子女や醫家の子女等をみるがいい。それ等の人々は、常に充分な榮養を攝り、西洋醫學的衞生を出來得るだけ實行してゐるに係はらず、何れも弱々しく、大方は腺病質である事である。

又醫師の短命も近來著るしい現象である。私は種々の博士の中、醫學博士が一番短命ではないかと思ふのである。之は誰かが統計を作つてみれば面白いと思ふのである。少なくとも人の病氣を治し、健康を增進させる役目である以上、何よりも自己自身が健康であり長命でなくてはならないし、又その家族の健康に於ても、醫學的知識の少ない世間一般の

人々よりも良くなければならない筈である。そうでなければ醫家としての眞の資格は無いと言つても、敢て侮言ではなからうと思ふのである。例へていへば如何に道德を說くと雖も自己が實踐出來なければ人を動かす事が出來ないのと同樣である故に、今日の醫學衞生の理論を最も信奉する人々がソえるに比例して、青白いインテリが增加するといふ事も適切な實證であらう。

以上によつて、私の創成した日本醫術が、如何なるものであるか、讀者は大体諒解されたと思ふと共に、ここに最も重要なる事は、その治病力の如何に素晴しいかといふ事である。私としては、事實あるがままを告白するとすれば、それは餘りに自畫自讚に陷らざるを得ないが、言はなければならないから敢て發表するのである。

病氣の根源は毒素である事、毒素とは膿汁又は毒血の凝結したものである事はいふ迄もない。勿論西洋醫學に於ても、その點は認めてゐるのであるが、但だ異なる點は、西洋醫學に於ては、微菌によつて毒素が增殖せられるといふに對し、私の方は、淨化作用によつて毒素が集溜するといふのである。故に、西洋醫學の傳染に對し、私の方では誘發と解し又、西洋醫學に於ては、凡ゆる病氣は、抵抗力薄弱によつて、外部から微菌による毒素が侵入繁殖するといふのに對し、私の方は、体内に於て集溜凝結した毒素が、淨化溶解作用によつて外部へ排泄される爲といふのである。故に、その療法原理に於ても、西洋醫學に於ては、体内に毒素を固むるのを目的とし、私の方は毒素を溶解して、体外へ排泄するのを目的とする。一は、固むるのを目的とし、一は溶かすのを目的とするのである。從つて固むる結果は病原を殘存させ、再發の因を作るのである。之に反し溶かす結果は、病原を排除し、再發の因を絶無にする事である。

右の如き、兩々相反する理論は、何れが眞理であるかは言を俟たずして明かであらう。然し乍ら、私の右の理論に對して、特に專門家は曰ふであらう。成程病氣の根原は毒素であるが、その毒素を溶解排除するなどは、實際上不可能で、それは理想でしかない。故に止むを得ず次善的方法として手術か又は固むるので、固め療法の發達したのもやむを得ないのであると、然るに、私が創成したこの日本醫術は、毒素の溶解排除の方法に成功した

のである。

現代醫學が如何に進歩せりと誇稱するも、皮下に溜結せる毒素に對し、切開手術を行はなければ、膿一滴と雖も除去し得ないのである。然るに私の方法によれば、外部から聊かの苦痛をも與へずして、如何なる深部と雖も自由に膿結を溶解排除する事が出來得るのである。盲腸炎は一回の施術によつて治癒し、齒痛は外部からその場で痛みを去り、他の如何なる痛みと雖も數回の施術によつて無痛たらしめ得るのである。肺結核も完全に治癒せしめ得、癌も解消せしめ得るのである。其他　疫痢も精神病も喘息も心臟病も痔瘻も醫學上難治とされてゐる疾患のその殆んどは治癒せしめ得るのである。

ただ私の療法で困難と思ふのは、醫療を加へ過ぎた患者である。特に藥物多用者とレントゲンや深部電氣、ラヂユウム等を幾十回も受用せられたものである。又、種々の療法を受けた結果、衰弱甚だしい患者に於ては、病原を除去し終るまで生命が保てないので、斯樣な場合は、不成績の止むを得ない事があるばかりである。

故に、發病後速かに本療法を受ければ、その悉くは全治するといつても過言ではないのである。從而、私の方では研究といふ言葉は無いのである。何となれば、病原も明かであり、治癒も確定してゐるから、其必要がないからである。

そうして今一つ重要なる事は、私の醫術は何人と雖も修錬をすれば出來得るのである。醫學的知識のない者でも、男女年齢の如何を問はず出來得るのである。而も、修練期間は普通一個年位で、數人の醫學博士が首を傾げた病氣でも治癒するので、そのやうな例は無數にあるのである。この寧ろ餘りにも卓越した醫術に驚歎せぬ者はあるまい。私は、事實そのままを述べてゐるつもりであるが、或は誇張に過ぎると思はれはしないかと、それを心配する位である。

そうして何千年來、醫學に於ける根本的誤謬に人類が何故氣附かなかつたかに對し、讀者は大いなる疑問を起すであらう。それと共に、私のやうな醫學的知識のない者が、如何にして、その誤謬を發見し得たかといふ事に對しても、同樣の疑問を起さずにはゐられないであらう。

右の二點を徹底的に説く事によつて、一切は闡明されるのである。勿論それは、宇宙の實体から歴史の推移、文化の變轉、靈と物質との關係、靈界の眞相、人間生死一如の眞諦にまでも及ばなくてはならないのである。

特に今、全世界如何なる人種と雖も、圏外に立つ事を許されない―現に行はれつつある處の空前の大戦爭、大渦亂で、誰もが言つてゐる處の世界の大轉換である。そうして此大轉換の由つて起つた根本原理と、私の創成した日本醫術との根本原理が、洵によく一致してゐるといふ事である、これ故に、此根本原理を知るといふ事は、獨り私の醫術のみに止まらないのであつて、將來に於ける世界の歸趨が、如何になりゆくやも、略々知る事を得るであらう。

之等一切を説示する事によつて、人間の生命、健康、病氣等、數千年來、人類の知らんとして知り得なかつた神秘は、白日の下に曝け出さるるであらう。そうして日本を主とする八紘爲宇の道義的新世界が建設された曉、全世界の人類が王化に浴し、平和を共樂せんとするも、その健康にして全たからざるに於ては、何の意味も爲さないであらう。基督は言つた。〝爾、世界を得るとも、生命を失はば奈何にせんや〟―と、實に宜なりといふべきである。

以上の意味に於て、私は健康の世界新秩序を創建すべき重大時期が來たのである事を信じて疑はないのである。それは猶太人の創成した唯物的醫術の舊秩序を以てしては、終に人類の生命は破滅に陷るより外はないからである。ちようど、自由主義國家群が、終に崩壞せざれば熄まざらんとするそれのやうに！

昭和十七年九月廿七日印刷
昭和十七年九月廿八日發行

（非賣品）

「明日の醫術」

著者　岡田茂吉

發行者　東京市蒲田區安方町一七一番地　原清作

印刷者　電話蒲田三八六四番

不許複製

發行所　東京市蒲田區安方町九四番地
合名會社　坂井商事出版部
電話蒲田三八六四番

420
396

終